

婦人と子ども

第貳巻第貳號

(明治三十五年二月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

黒子太郎(おしまい)

やまとの翁

儲も黒子太郎わ 鬼の婆さんのお蔭で 見事鬼の  
 頭から 三本の金の毛をとる事ができた其上にあ  
 の三の事の譯も聞かせて貰ったもんですから、喜び  
 勇んで お城の方へと 歸ってきました所が やが

て 例れいの渡わたし場ばえ着つきました。すると渡わたし守いりわ、  
待まちち構かまえて居がって

渡守わたま「やー 太郎たろうさん お歸かえりですか、時ときにあのお話はな  
しは どーでしよー」太郎たろう「そー、約束やくそくどーりいつてあ  
げよー、けども まー前ま私わたしを向むかえ着つけて下ください、で  
なければいわない」そんならとゆーので、船ふねわすぐ  
向むかへ側がわえ着ついた。そこで 太郎たろう「わ 鬼おにから聞きいたと  
ーりにいつた。

太郎たろう「誰たれか 今こん度どこゝを渡わたしてくれといつて船ふねに乗のる  
人ひとがあつた時とき お前まえさんの楫かぢを其その人ひとに渡わたして仕舞しまえ

ば、夫でいーのだ」

それから次にわ又林檎の枯木が立って居る町え  
 やって来た處がこゝにも番人が待ち構えて居って  
 番人「やーお歸り、あのお返事わどーです」

太郎「あーこーだ、木の根を鼠が齧んでゐるのだから  
 夫を殺してしまえば又々黄金の實がなるのだ」

やーそーでしたかとゆーので、番人わ大變に喜んで  
 御禮だといって太郎に二匹の馬え金や銀を一ば  
 いに積んでくれました。

それから太郎わこれをひっぱってだんくやつ

て來た所が第一番目の町え着いた。そこわ例のお酒の流れる河が止つてしまつたとゆゝ所なのです。

番人太郎さんお歸り、あの譯を聞かせてくれますか」  
 太郎譯といつて別に何でもないのでさ、水の流れてくる處の石の下に、大きな蛙が居るから、夫を取り出して殺してしまえば又もとのとーりお酒がながれて來るのだわね」  
 そこで、この番人も大喜びで以て又々馬二匹に金銀を一ぱい積み込んで、太郎に御禮にくれました。

も と 子



かよーにして黒子太郎わ 何事も何事も甘く行き  
 まして、嬉し喜んで、大急ぎでお城え歸りました。  
 所が お姫様わ 太郎が もーとても歸ってくる事  
 わあるまいと思つて 毎日く心配して暮らして居  
 った所でしたから夫わく大變なお喜で、おまけに  
 太郎が大變に澤山金や銀を持って歸つたものですか  
 ら「まー」といつたきり、吃驚して眺めて居る許りです。  
 太郎わ お姫様に其譯を 手短かく話して すぐ  
 王様の前え出て、申し付かつた三本の金の毛を奉り  
 ました。 王様わこれをご覧になり 又澤山な金銀が

四匹ひきの馬うまに積つまれて居ゐるのを見みて 大變たいへんお喜よろこびにな  
りまして

王わうさて 黒子くろこ太郎たろうよ いよく 朕わたくしの言い一つけた通とり  
にしたからにわ よろしー、これから 朕わたくしの處とこの智ひこさ  
んにしましよー。 けれど一いつ体たい こんなに澤山たくさんな金きんや  
銀ぎんをお前まへわ どこから取とつて來かたのか それを 朕わたくしに  
いってくれないか』

で、 黒子くろこ太郎たろうわ 其譯そのわけを殘のこらず申まし上げました。  
所ところが 一いつ体たい慾よくの深ふかい王様わうさまですから

王わう夫そとでわ 今いまから 朕わたくしも 行いつて そーゆーふーにして

もつと澤山貰つて來よ』とゆゝのでこの慾深王、  
 様わ早速黒子太郎の行つた方え尋ねて行きました。  
 處か第一番目の町え着いても、番人わ一向お酒の  
 河の事を尋ねません、第二番目の町え行つても又、  
 林檎の咄をしません、と一く、第三番目に彼の  
 河の處え着きました。すると例の渡し守りが待つて  
 居ますから王様わ何心なく其船え乗りました所  
 が渡し守りわ黙つて向え漕いで行つて、偕て向  
 岸え着くが早いか突然持て居た楫を、王様の手  
 え渡しして置いて、自分わ忽ち身を躍らせて船か



ら飛び降りてしまった。

そこで今迄渡し守りの持つて居た楫が王様の手  
に持たされたものだから渡し守りわ無事に逃げ  
て仕舞って其代り王様わ自分が悪い事をした  
酬にいつまでもあちらへ行ったりこちらへ行つ  
たりしてこの河を漕がなければならぬ様になりま  
した。

それから誰も其河へ行つて楫を取つてやる人が  
ないものですから今でもこの王様わそのこの處  
で一生懸命に船を漕いでいますとさ。めでたしく